午後公開

第１学年　美術科学習指導案

１年１組　男子 19 名　女子 16 名　計 35 名
指　導　者　　宮田　苑佳
【授　業】６月５日(金)　13：00～13：50　会場　美術室（３階）
【協議会】　　14：10～15：10　会場　美術室（３階）

１　題材名　　“存在”を描く―手のドローイング―

（学習指導要領に関する内容）第１学年
A 表現　　（１）ア、イ　（３）ア、イ
B 鑑賞　　（１）ア
〔共通事項〕　（１）ア、イ

２　題材について

（１）題材設定の趣旨

本題材では、手のドローイングを通して、表現方法を試行錯誤し、主題に合った表現を選択する力を身に付けさせたい。ドローイングは「線で形を捉えること」を特徴とし、デッサン以上に作者の個性や意図が線に表れやすい。よって、描画技術の向上よりも、主題に合った表現の模索を重視する本題材において、ドローイングは適切な表現手段だと考えた。また、今回のモチーフである手は、形を捉える基礎となるだけでなく、顔と同じくらい豊かな感情表現が可能である。主題への理解が浅い生徒にとって、手は主題と表現を結び付けやすいモチーフであろう。

本題材で生徒が表現する主題は“存在”である。ここでいう“存在”とは、単に「そこにあること」をさすのではなく、作者との関係性のことを意味する。したがって、単に手をよく観察して写実的に描くのではなく、何かをしている手を描くことで、手に持っている（手に触れている）ものが自分にとってどのような存在（例：思い出の品、癒しをくれるもの等）なのかを表現することが重要である。そのため、生徒は持っている（触れている）ものの大きさ、重さ、質感だけでなく、ものを持っている（触れている）ときの具体的な場面や感情を想像しながら、個人の主題を深めていく。そして、その主題に合わせて素描画材を選択したり、線の描き方や構図を工夫したりする。実際には見えないものを表現させることで、生徒は「何を表現したいのか」をじっくりと考え、主題をしっかりと意識した表現を選択できるようになるはずである。

（２）生徒の実態

中学校に入学して初めての授業では、レオナルド・ダ・ヴィンチとパブロ・ピカソ、表現が両極端の人物画を鑑賞した。この鑑賞を通して、生徒は多様な表現に価値を見いだしており、技術以上に作者の個性や思いを大切にしていきたいという思いを強くしている。図画工作が好きだった生徒が多く、中学校でも引き続き、美術の授業に積極的に取り組んでいる。しかし、細部の表現の工夫に注目できる生徒はまだ少なく、構図については形や色に比べて意識が薄い。小学校では、画面いっぱいに大きく描くようにとだけ教わってきた生徒がほとんどである。そのため、作品制作の前に様々な素描画材を試し、特徴の違いを感じ取ったり、鑑賞を通して構図の効果を感じ取ったりする活動を行い、ある程度〔共通事項〕を理解した上で、明確な意図をもって表現を工夫させたい。

（３）指導の構え

本題材における「深い学び」の状態を「主題を深め、主題に合った表現を選択することができる状態」とした。評価規準は次のとおりである。

評価規準（ルーブリック）

	「深い学び」に到達している		到達できていない
	A	B	C
①主題を深め、主題に合った表現方法を工夫できる。（表現に明確な意図がある。） ②素描画材の特徴、線の形や濃淡、構図の効果を理解し、意図的に表現に生かすことができる。 ③主題に合った表現方法を的確に選択し、造形作品として表現することができる。	【A+】 ①～③ができている。 ※素描画材の特徴、線の形や濃淡構図の効果をすべて生かしている。 【A】 ①～③ができている。	【B】 ①と②ができている。 ①と③ができている。 【B-】 ①のみができている。 ※〔共通事項〕の理解が曖昧で、感覚的に表現方法を選択している場合、表現方法を工夫しているが、造形作品として十分に主題を表現しきれていない場合を想定した。	・①～③いずれもできていない。

生徒が主題に合った表現方法を自由に選択できるようにするためには、事前に一定の技術や知識を習得する必要がある。また、描くことに対して苦手意識をもつ生徒が多いため、描くことへの抵抗感を和らげ、積極的に授業に取り組めるように工夫していかなくてはいけない。そこで本題材では、実体験をもって様々な表現を考察できるように、以下の手立てを行う。

＜第１次＞

・単純な形から順番に、形を捉え、線描で再現する練習を行う。

・素描画材を試す機会を設け、各画材で表現できる線の特徴を表にまとめさせる。

・影の付け方を理解させるため、実際の影を観察しながら、描画の練習を行う。

＜第２次＞

・同じモチーフで構図の異なる作品を鑑賞したり、人物画の構図を自由に変えたりする活動を通して、構図の効果を認識させる。

＜第３次＞

・手に持つ(触れる)想定のものをよく観察させ、特徴を表にまとめさせたり、思考ツールを活用してキーワードを広げさせたりしながら、主題構想の深まりを図る。

・ジャスチャーゲームを通して、手がもつ豊かな表情を感じ取らせる。

・様々な形、大きさ、質感の素材を用意し、それらを手で持ったときの手の骨格や筋肉の動きを観察させ、写真に記録させる。

・主題に合った素描画材を選択できるよう、様々な素描画材で試し描きができる機会を設ける。

・デッサンスケール等の枠を使って、構図のパターンを試すことのできる機会を設ける。

３　研究主題・副題との関連

「自立した学習者」を自分の学びを自己調整できる者とし、美術科では以下の図のように仮定した。

＜中学校３年間で目指す「自立した学習者」の姿＞

・生活や社会の中の美術、美術文化と豊かに関わるための工夫ができる者（美術科ならでは）

・多様な考えを取り入れつつも、自分の価値観をしっかりともち、自己実現（社会貢献）のために試行錯誤し、適切な方法を選択できる者（美術科の学習を通して、他へ応用）

＜表現の活動＞

自分で主題を生み出すことができ、主題に合った表現方法を試行錯誤し、選択できる者

※前提として〔共通事項〕を理解している。

＜鑑賞の活動＞

多様な考えを取り入れ、視野を広げつつも、美術的に自分なりの考えを形成でき、実生活にあるものを美術的に捉えられる者

※前提として〔共通事項〕を理解している。

本題材では、素描画材の特徴、構図の効果等を理解した上で自分の主題に合った表現方法を選択し、主題を表現できている生徒を「自立した学習者」とした。第１次、第２次では描画技術の習得や〔共通事項〕の理解を目標としているため、教師と生徒間の学びの往来を中心とする。第３次の作品制作では、自分自身との対話、作品や素材との対話が中心となるが、新しい表現の開拓には他者との対話も不可欠である。そこで、第３次の学習では、以下のように学びの往来の場面を設定した。

【主題構想の場面】

＜個人⇔モチーフ＞

手に持っている（触れている）ものをよく観察し、そのものとの思い出(使っている場面等)を想像しながら、キーワードをワークシートにまとめる。

＜個人⇔小グループ＞

互いの主題を簡単に紹介し合う。友人に自分の考えを伝えることで、自分の考えの深まりを客観視する。また、自分の考えが曖昧だった場合は、友人の考えを参考に別のアプローチで主題を再考する。

【表現方法の吟味の場面】

＜個人⇔素材＞

様々な素描画材で試し描きする。素描画材の線の雰囲気と自分の主題を照らし合わせ、より主題に合った素描画材を選択する。

【制作の場面】

＜個人⇔作品、個人（過去）⇔個人（現在）＞

毎時間、制作途中の作品を写真で撮影し、表現の達成度（どこまで主題の表現に近づけているか）を振り返り、ポートフォリオとしてスライドにまとめる。制作を始める前に、前時での振り返りを確認し、見通しをもって制作を進める。制作最終回の前時には、より納得のいく表現となるよう、最後に微調整したいことを記入する。

【相互鑑賞の場面】

＜個人⇔小グループ＞

互いの作品を鑑賞し合い、表現の工夫を見付け合う。鑑賞者は表現の工夫から受ける印象（表現によって得られる効果）を伝え、作者はもらった意見と自分の主題とを照らし合わせ、よりよい表現を再考する。

４　題材の目標

○　素描画材の特徴や構図の効果を理解することができる。【知識】

○　作品の状態に応じて、適宜に制作スケジュールを調整しながら、計画的に制作を進めることができる。【技能】

◎　素描画材の特徴、線の形や濃淡、構図の効果を生かし、主題に合った的確な表現方法を選択して、ドローイング作品として表現することができる。【知識・技能】

◎　表現したい思い（主題）を深め、様々な表現方法を試行錯誤し、主題をより明確に表現できる方法を見つけることができる。【思考・判断・表現】

○　友人の作品から表現の工夫をできるだけ多く見つけ、表現の工夫から作者が表現しようとした主題を感じ取ることができる。【思考・判断・表現】

○　主題をより明確に表現するために積極的に表現方法を模索し、作品制作に取り組んだり、友人の作品からよさや美しさを感じ取ろうとしたりしている。【主体的に学習に取り組む態度】

５　全体計画（全９時間）

第１次	素描の基礎を学ぶ	２時間
第２次	構図の工夫を考える	１時間
第３次	手のドローイング制作を行う	６時間（本時２／６時間）

	学習活動	知・技	思	態	評価規準・評価方法・留意点等
1	＜素描の基礎を学ぶ＞2 時間 ・理科のスケッチと比較しながら、美術科における描くことの意味と主題の大切さを確認する。 ・素描画材の試し描きをして、素描画材の特徴を掴む。［個人⇔素材］ Q. それぞれの素描画材では、どのような雰囲気の線が描けるだろうか？ ・丸やルビンの壺を描く活動を通して、形を捉えるコツを掴む。	知 ↓			留意点 ・試し描きするだけでなく、素描画材を使って描ける線の雰囲気を記録させる。 指導に生かす評価 ・材質がもたらす効果を理解している。 【知識】（ワークシート） 留意点 ・正確な形が描けなくても、すぐに消しゴムを使わず、活かせる線を探すように促す。
	・実際の影の形を確認しながら、影の付け方を確認する。［個人⇔モチーフ、個人⇔教師］ Q. 立体感を表現するためには、何が必要？ ・骨格を意識しながら、開いた状態の手を描く練習をする。［個人⇔モチーフ、個人⇔教師］	技 ↓			指導に生かす評価 ・モチーフをよく観察し、その特徴を丁寧に線描で捉えることができる。 【技能】（作品）
2	＜構図の工夫を考える＞ ・構図とは何かについて確認する。 （画面の中でのモチーフの配置。位置、大きさ、傾き） **構図が変わると、何が変わる？** ・クロード・モネの睡蓮の作品を数点、比較鑑賞し、構図が異なれば、モチーフとの距離感や作者の目線が変化することを捉える。 ［個人⇔作品、個人⇔教師］ ＜モチーフとの距離＞ 《睡蓮》1897～1898 年、ロサンゼルスカウンティ美術館 《睡蓮》1915～1926 年、カーネギー美術館蔵 Q1. モチーフはどのように配置されている？ Q2. 作者はモチーフをどの位置から描いている？ ＜作者の目線＞ 《睡蓮の池》1899 年、ロンドンナショナルギャラリー蔵 《睡蓮》1906 年、シカゴ美術館蔵 Q3.（構図に注目して）何が違う？ Q4. 作者とモチーフとの距離はどうだろうか？ Q5.（モチーフとの距離が同じならば）何が違うのだろうか？	知 ↓			留意点 ・生徒から出た発言を基に、構図の効果をまとめる。 指導に生かす評価 ・構図による効果を理解している。 【知識】（発言）
	・人物の配置を変えながら、黒田清輝作《湖畔》を鑑賞し、余白を変えることで、画面の雰囲気が変化することを捉える。 ［個人⇔作品、個人⇔グループ、個人⇔教師］ Q6. 構図はそれぞれ、どのようになっている？ Q7. 構図が変わると、女性の雰囲気はどのように変化する？		鑑 ↓	態鑑 ↓	留意点 ・女性の表現（顔の表情や仕草、体全体の大きさ、色、筆致等）が変化していないことを確認し、余白の取り方や人物の視線に注目させながら、構図の変化による印象の違いを感じ取らせる。 指導に生かす評価 ・構図の工夫から、作品全体のイメージを感じ取ることができる。 【思考・判断・表現】（発言）
	・ヨハネス・フェルメール作《真珠の耳飾りの少女》の少女の雰囲気に合った構図を考える。 ［個人⇔作品、個人⇔グループ］ Q8. 少女の雰囲気に合った部屋（構図）を考えよう。		表 ↓	態表 ↓	留意点 ・女性の雰囲気（性格、気持ち）をしっかりと捉えた上で、女性の雰囲気に合った構図を考えさせる。

	・菱川師宣作《見返り美人図》の女性が何を見ているのか（どのような状況なのか）を想像し、女性の視線の先や周りにあるものを想像しながら、女性の置かれた状況を感じさせるような構図を考える。 ［個人⇔作品、個人⇔グループ］ Q9. 女性の視線の先にあるものを想像して、構図を考えよう。 ・構図の効果をまとめる。 ・次回の手のドローイング制作の目標を確認する。				・グループ共有を通して、表現したい雰囲気が同じであっても、様々な構図のパターンが考えられることを理解させる。 留意点 ・モネの鑑賞、フェルメールの構図検討を生かしながら、女性が見ているものの存在を感じさせるような構図を考えさせる。 指導に生かす評価・記録に残す評価 ・構図による効果を生かしながら、作品の雰囲気に合った構図を考えることができる。　【思考・判断・表現】（スライド・発言） 指導に生かす評価 ・鑑賞や表現の活動を通して、構図の効果に注目し、作品の見方や感じ方を広げようとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】 （スライド・活動の様子）
3	既習事項を生かしながら、手のドローイング制作に取り組む。 **手を使って「〇〇な存在」を表現しよう。** ＜構想２時間＞　本時２／２時間 ①主題構想 ・ウェビングマップ等を利用して、日常生活において、「手で持つ」ものや「手で持つ」という動作にどのようなものがあるかをイメージさせる。 ・落語の見立てやレオナルド・ダ・ヴィンチ作《女性の手の習作》等を見て、実際には存在しない（描かれていない）のに“存在”を感じさせる手の動きの面白さを感じ取り、題材の目標を確認する。 ・手に持っている（触れている）想定のものをよく観察しながら、どのような“存在”を表現したいのか（主題）を考える。　［個人⇔モチーフ］ Q１．手に持っている（触れている）場面を具体的に想像してみましょう。 Q２．手に持っている想定のものは、自分にとってどのような存在だろうか？ ②表現の吟味 ・主題に合った表現方法(手のポーズ、素描画材、線の描き方、構図)を模索する。 ・自分の主題を互いに共有し、自分の考えの深まり具合を客観視する。　［個人⇔小グループ］ ・考えの深まり具合に応じて、主題を再検討したり、表現方法（手のポーズ、素描画材、線の描き方、構図）を検討したりする。 ［個人⇔素材、モチーフ、作品］ Q３．“〇〇な存在”を感じさせるには、どのように表現を工夫すればよいだろうか？ ・構想が固まり次第、制作に向けての目標や制作スケジュールを考える。		表 ↓	態表 ↓	留意点 ・手に持っている（触れている）想定のものの形や大きさ、質感等の特徴をワークシートに整理させる。 ・手に持っている想定のものが、自分にとってどのような存在なのか、そのものを使っている（人や動物の場合は、一緒にいる）場面を想像しながら、主題を深めさせる。 ・思考ツールを活用しながら、主題につながるキーワードを整理させる。 ・アイディアスケッチを描かせるだけでなく、手を多方面から撮影させ、作品のイメージをもたせる（特に描画技術に自信のない生徒に対して）。 指導に生かす評価・記録に残す評価 ・主題を深め、様々な表現方法を試行錯誤し、主題をよりはっきりと表現できる方法を見つけることができる。 【思考・判断・表現】 （ワークシート、アイディアスケッチ） ・主題をより明確に表現するために積極的に表現方法を模索しようとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】 （ワークシート・活動の様子）

	＜制作２時間＞ ・構想を基にドローイング制作を進める。 ・制作後、制作途中の作品を写真撮影し、主題をどこまで表現できているかを振り返る。また、次の制作に向けての目標を入力する。 ［個人⇔作品、個人（過去）⇔個人(現在)］	技 ↓		態表 ↓	留意点 ・上手く描けたか否かではなく、線の描き方に注目させ、主題の再現度を振り返らせる。 指導に生かす評価・記録に残す評価 ・素描画材の特徴、線の形や濃淡、構図の効果を生かし、主題に合った的確な表現方法を選択して、ドローイング作品として表現することができる。 【技能】(作品、スライド) 記録に残す評価 ・作品の状態に応じて、適宜に制作スケジュールを調整しながら、計画的に制作を進めることができる。 【技能】(作品・スライド) ・主題に合った、よりよい作品となるよう、明確な意図をもって積極的に作品制作に取り組もうとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】(スライド)
	＜相互鑑賞１時間＞ ・互いの作品を鑑賞し合い、作品全体のイメージや作品の主題を感じ取ると共に、表現の工夫を見付ける。 Q1．友達の作品から、表現の工夫を見付けよう。 Q2．その工夫によって、友達はどのようなことを表現したかったのだろうか？ ・相互鑑賞を受けて、自分の作品を見直し、さらによりよい作品にするために施せる工夫を考える。最後の制作に向けて微調整したいことをポートフォリオに入力する。		鑑 ↓	態鑑 ↓	留意点 ・手のポーズ、素描画材の選択、線描の仕方、構図に注目させ、表現の工夫と作者の意図を関連付けて、考えるように促す。 記録に残す評価 ・友人の作品から表現の工夫を見付け、表現の工夫から作品全体のイメージや作品の主題を感じ取ることができる。 【思考・判断・表現】スライド) ・友人の作品から積極的に表現の工夫を多く見付けようとしており、表現の工夫から作品全体のイメージや作品の主題を感じ取ろうとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】(スライド)
	＜制作１時間＞ ・前時の相互鑑賞を受け、最後の微調整を行う。 ・作品票を記入し、授業全体を通して学んだことをポートフォリオに入力する。	技 ↓			記録に残す評価 ・素描画材の特徴、線の形や濃淡、構図の効果を生かし、主題に合った的確な表現方法を選択して、ドローイング作品として表現することができる。【技】(作品、作品票)

６　本時の学習（全５／９時間）

（１）指導目標

グループ共有をきっかけに自分のアイディアを見直し、より自分の思いを表現できる方法を考えさせ、今後の制作に見通しをもたせる。

（２）展開

学習活動と予想される生徒の反応	指導上の留意点
１．学習課題を確認する。	
“○○な存在”を感じさせるには、どのように表現を工夫すればよいだろうか？	
２．クイズ形式で自分の考えをグループで共有する。［個人⇔グループ］	・グループ共有を通して、主題の深まりの度合い（手に持つ“存在”と自分との関係性を十分に考えられている

・鉛筆を持つ手を描く場合 【主題が深まっていない】鉛筆＝文字を書くもの 【主題が深まっている】鉛筆＝勉強のやる気スイッチ ・ボールを持つ手を描く場合 【主題が深まっていない】ボール：部活動で使うバスケットボール 【主題が深まっている】ボール：部活動の練習を頑張るときの相棒 ・リレーのバトンを持つ手を描く場合 【主題が深まっている】バトン：次の走者にみんなの思いを繋ぐもの ※自分にとってどのような“存在”なのかを考えられているとよい。	か）を作者に認識させる。また、手のポーズだけではテーマを表現しきれないことを認識させる。
３．同じ手のポーズだが、異なる素描画材や構図で描かれた参考作品を鑑賞する。 （例）鉛筆を持つ手 【HB の鉛筆】 ・線が薄いので、明るくて楽しいイメージがする。 ・線が何重にも重なっているから、動いているような感じがする。 【ダーマトグラフ】 ・太くて濃い線なので、力強い感じがする。 ・太い線なので、力が入っている感じがする。一生懸命問題を解いている手なのかもしれない。 【画面の右端に寄った構図】 ・左側にスペースがあるから、そこには今まで書いてきた文字がたくさんあるのかもしれない。 【画面いっぱいに見切れるくらいに大きく描いた構図】 ・手に焦点が当てられているから、手や手に持っているであろうものが強調されているように感じる。 ・自分の手元に注目している感じがするから、作者が鉛筆を持って勉強に集中しようとしている様子を表現しているのかもしれない。	・同じ手のポーズであっても、素描画材や構図、描線の質の違いで印象が変わることを実感させ、自身の制作で工夫できそうなことをイメージさせる。 ・線や構図の特徴から受けるイメージのみを答える生徒が多いことが予想されるため、表現と主題とのつながりが感じられるような（具体的なストーリーを感じられる）意見を取り上げ、全体で共有する。
４．自分の実態に応じて、主題を見直したり、表現の検討を行ったりする。 過去の自分との対話［個人(今)⇔個人(過去)］ 主題との対話、素材との対話［個人⇔作品］	・スケッチブックに同じ手のポーズを様々な素描画材で試し描きしたり、線の描き方を変えたり、様々な構図を試したりするように促す。(「主題再検討、ポーズ再検討」、「素描画材お試し」、「構図お試し」、「線描追求」の四つの表現を試すスペースを設け、自分の関心に応じて移動する。) ・ラフスケッチを描くだけでなく、印象の違いを記録させる。 ・描画技術に自信がない生徒に対しては、手を単純な図形に置き換えて描き、様々な表現を試すように促す。 ・主題が深まっていない生徒に対しては、“存在”を持っている（触れている）ときの具体的な場面を想起させ、ワークシートを用いて、主題の構想を深めさせる。
５．全体で共有する。 ［個人⇔全体］ ・愛犬をなでている手を描いて、自分にとっての“癒しの存在”を表現したい。そのために素描画材は H 系の鉛筆を使い、少し力を抜いて薄い線を何重にも重ねて、柔らかい雰囲気を出したい。 ・リレーのバトンを持つ手を描いて、“みんなの思いをつなぐ存在”ということを表現したい。画面いっぱいに手を描いたり、ダーマトグラフで濃く太く線を描いたりして、みんなの思いが合わせって思いが強くなっていることを表したい。	・主題に合った表現を見付けることができている生徒のラフスケッチを紹介し、主題を表現するためにどのような工夫を試してみたのかを発表させる。

６．全体共有を受け、次回の制作に向けての目標を記入する。 自分との対話	

（３）学習評価の観点

・自分の考えの深まりを客観視し、素描画材を試したり、構図を試したりしながら、自分の思いをより明確に表現できる工夫を考えることができる。　【思考・判断・表現】（ワークシート）

・自分の思いをより明確に表現できるよう、主題をさらに深め、主題に合った表現方法を積極的に探ろうとしている。　【主体的に学習に取り組む態度】（ワークシート・活動の様子）

７　授業観察の視点

・構想を深める前にグループ共有を行ったことは、個人が自分の考えを客観視し、主題に合った表現を試したいという意欲につなげることに有効であったか。

・主題を表現するためにどのような工夫を試したのかを全体で共有したことは、表現活動における考え方を理解し、その後の制作への見通しをもつ上で有効であったか。